

がん看護専門看護師活動から考える 多職種連携でつむぐ放射線看護

Consideration of radiological nursing by multi-occupation collaboration from practice of cancer nursing CNS

三浦 浅子

Asako MIURA

公立大学法人福島県立医科大学看護学部講師／附属病院看護部がん看護専門看護師（兼務）

Fukushima Medical University

本シンポジウムでは、がん看護専門看護師活動を振り返り、多職種でつむぐ放射線看護を考えてみたい。当院では、2013年から放射線看護高度実践コース等の実習を受け入れている（長崎大学大学院1名、鹿児島大学大学院7名、弘前大学大学院4名）。私は、がん看護専門看護師の教育活動として、実習受け入れの整備や実習指導を担当している。同時にがん看護専門看護師の実習も受け入れているので、がん看護、放射線看護の相互学習の場となり、専門的な同職種の連携につながっている。

放射線看護実習は、多職種連携がつむぐ放射線看護の一躍を担っていると考える。たとえば、頭頸部癌の化学放射線療法での口内炎について、病棟看護師は放射線治療によるものと考えていた。実習生は、放射線治療計画、線量分布図から口内炎の部位は放射線治療区域外だったことを指摘すると共に放射線量分布図について教育する機会とした。その後、病棟看護師は放射線治療計画の情報収集をするようになり、根拠に基づいたアセスメントと看護ケアをするようになっていく。また、骨軟部腫瘍治療後に肺転移の放射線治療をしていた20歳代の患者は、今後の見通しに不安を持っていた。実習生が整形外科外来の看護師と調整を行い病状説明の場に同席した。これは、外来診療中に円滑に連携したことで、患者や家族の不安の軽減に貢献できたと考えられる。さらに、当院の看護師の放射線看護の学習ニーズを調査し、学習目標にあった研修を実施したことは、同職種連携による教育活動になっていた。平成30年度の実習では、4人の実習生が放射線治療部門で診療を受けている患者を受け持ち、医師、看護師、薬剤師等との連携を通して、症状マネジメント、意思決定支援等を学んでいた。放射線化学療法中の頭頸部腫瘍、食道癌、肺癌の患者や、放射線療法後の排尿障害のある患者の症状マネジメントにおいては、がん看護や放射線治療看護を統合した学びが必要で、病棟看護師と放射線治療棟の看護師の橋渡しをしていたと考えられた。このプロセスは、放射線外来および病棟看護師と協働に発展していくと考えられた。今後、放射線看護の実践者には、同職種看護領域（がん看護、急性重症看護、災害看護等）での協働によって、看護の質を高めて行くことに寄与することが望まれていると考える。

がん看護専門看護師活動では、進行性癌のAdvance Care Planning(ACP)に参画する機会が増えてきている。たとえば、卵巣腫瘍の術後化学療法後の直腸・膣瘻、膀胱瘻の事例で、手術療法が放射線療法を選択するという意思決定支援が行われた。今回は婦人科医師が意思決定支援に係わり、患者・家族も手術療法を選択した。

doi: 10.24680/msj.7.1_38

しかしながら、手術はハイリスクが伴い、放射線療法が適応ではないかという考えもある。このような場合、婦人科、泌尿器科、麻酔科、放射線科、看護師等で合同カンファランスがあった方がよいと提案された。この多職種連携の場に、放射線看護を学んだ実践者が参加することが必要と考える。患者の擁護者として、また、放射線看護の専門家として意見や考えを述べることは大変意義深く、放射線看護が充実していく機会となり、放射線看護の実践者たちが多職種協働の中で放射線看護をつむいでいくことが期待できると考える。